



# ほんの裏 ばなし

■編著者 高田正子さん が明かす

中日新聞の「平和の俳句」の選者を務め、昨年に84歳で亡くなった俳人の黒田杏子先生。この全4巻のシリーズは、先生の生前の作品から特定のテーマを詠んだものをえり抜き、それぞれ1冊にまとめました。1巻が「螢」、2巻が「月」、3巻が「雛」、4巻が「櫻」で100句ずつ。選句は約40年来の弟子で編者の私が担当しました。まずは螢の句。へーの橋二の

## 「黒田杏子俳句 コレクション」全4巻 コールサック社 (各巻1980円)

黒田杏子 1938年、東京都出身。山口青邨に師事。博報堂に勤めていた82年に初の句集「木の椅子」で現代俳句女流賞と俳人協会新人賞を受賞し「キャリアウーマンの俳人」と呼ばれた。戦後70年の2015年から本紙に掲載された「平和の俳句」では、親交のあった俳人の金子兜太さんに代わり17年に選者を引き継ぎ、22年まで務めた。主な著書に『手紙歳時記』『季語の記憶』（いずれも白水社）など。

橋はたるふぶきけりくなど、群れて流れていくように舞う螢を「ふぶく」と表している作品が重要です。1980年代に東京女子大の先輩の小説家・瀬戸内寂聴さんと京都市の景勝地の清滝を訪れた時に初めて抱いた感慨で、「私だけの表現」だと自負していた。  
〈漕ぎいづる螢散華のただ中に〉などの「螢散華」も、先生に独特の表現。四国の四万十川を舟で下った時の情景です。散華は、仏を供養するために仏前に花をまき散らすことですが、螢を花に例えている。この句を詠んだのは還暦を超えたころ。世話になった故人への弔いの意味

# 人生かけ詠んだ句 厳選

編著者が第3回星野立字賞を受賞した際、選者として表彰式に出席した黒田杏子さん



も込めたのだと思います。先生は蛍狩りに何度も同じ場所を訪れました。長年にわたり螢を見続けてきた体験と、瞬間の螢を見て感じたことがクロスしたところで新しい季語を生み出した。頭でこねくり回したのではなく、現場で起きていることを全身で受け止めたがゆえの強さがある。

そんな先生は生前、神仏には「健康」「文運」「黒髪」の三つを祈ると、周囲に冗談めかして語っていました。これを詠み込んだのが〈健康文運黒髪寒満月〉。先生は、いつく冬空に張り詰めた満月のようにピリッとした人でした。そんな自身の生き方と、三つの願いを取り合わせる句を思い付いた時は、ハッと

したんじゃないかと思う。先生は、大手の日本人形販売会社が公募する雛がテーマの俳句の選者を39年にわたり務めました。そんな中で自身が詠んだ句にも見るべきものがある。雛かざるいつかふたりとなりてゐし。〈子を持たぬ私が選ぶ雛の句〉。全国から寄せられるさまざまな句の世界に浸ることを通じて、いろいろな人生を生きていることができたのではないか。  
〈生くること死ぬこと花を待つことも〉。桜を愛した先生にとっては、咲いた花を見る時だけではなく、咲く姿を想像して待っている間も大事な時間だったはず。〈身の奥の鈴鳴りいづるさくらかな〉。お遍路がつかえの鈴を響かせて歩むように、りんりんという音を体の奥底に感じながら、桜とともに人生の遍路をしていたようにも思う。  
喪失は何ものによっても埋め合わせられない。その喪失をそのものとして受け入れようという含蓄の深い句だ。〈ひとのみなひとわすれゆくさくらかな〉を、社会学者の上野千鶴子さんはこう評しました。先生はこの句の趣旨を語らなかったけれど、上野さんの指摘を喜んでいました。俳人が人生をかけて詠んだ句には、鑑賞者は自身の人生をも託すことができるのです。(聞き手・林啓太)